

11th ICFIA に参加して

北見工業大学化学システム工学科

小俣 雅嗣

11th ICFIA がタイ国北部最大の都市チェンマイで、2001年12月16日から5日間開催された。本会議の報告をFIA分析研究懇談会の新参加者である筆者が酒井先生（愛知工業大学）の依頼を受けて担当することになった。正式な内容等は「ぶんせき」誌3月号に受田浩之先生（高知大学）が執筆されたのでそちらを御覧いただきたい。ここでは、私的な感情を多分に含んだ内容となることを御容赦願いたい。本会議の参加総数は約120名で、日本からの参加者は同僚者（3名）を含めて総勢24名とかなりの割合を占めた。タイ国は、近くて時差もほとんどなく、気候が良く物価が安い、また仏教寺院に興味がある方にとってはパラダイスなどの理由から一年間この会議への参加を心待ちにしていた人も多いと思われる。もちろん研究成果の発表の場としても。

日本からの参加者は、東京（成田）、関空、福岡の各空港から15日にそれぞれバンコク経由でチェンマイ空港に降り立った。荷物チェックがまったくなく、簡単な入国審査のあと、ワゴン車に分乗して会場と我々の根城となる Amari Rincome Hotel に到着した。ホテルは木彫の壁飾りなど木材が多く使われており、落ち着いた佇まいであった。チェックインを済ませたあと全員で遅い夕食（もちろん辛いタイ料理）をホテルのレストランでとった。明日からの会議に備えビールなどで、英気を養ったことは言うまでもない。

レジストレーションが16日午後からと云う事も有り、16日は朝から全員でチェンマイ観光へ繰り出した。まず、ステープ山の山頂にある金色に輝くプラタード・ドイ・ステープ寺院へ。寺院からは堀に囲まれた旧市街や周りに広がるチェンマイ市街を一望できた。寺院周辺でお土産を売る昔お嬢さんだった方々の熱心な仕事振りから逃れるために、本意に反してお土産を購入した方も多かったと記憶している。このあとタイシルク店など数カ所見学した。17時からのオープニングセレモニーでは、主だった先生方の挨拶ののち、本会の準備とサポートを行う学生に対しての表彰や、古典舞踊などがあり、ドラをたたいて開会の合図とした（写真1, 2）。

17日朝からいよいよ口頭及びポスターの発表が始まり、日本分析化学会 FIA 研究懇談会の先鋒として本水先生が発表された。多くの発表者が液晶プロジェクターを用いたため、プレゼンに動きが加わり非常に理解しやすく、また飽きさせないもので、作成した先生方の苦労を考え合わ



写真1



写真2

せて感心した。また、コンピューターに関するトラブルはサポートする学生が迅速に対応したためほとんど支障なく発表が進行した。ポスター発表は、昼食後中庭で木漏れ日の中行われた。雨が降ったらどうするのだろうかという考えは杞憂であった。聞けばタイ国のこの時期は乾期で滞在中シャワー程度の雨が1回あっただけだった。発表終了後、チェンマイ市内のとある場所では有志による懇親会が行われた。オーガナイザーである Dr. Kate Drudpan 研究室の学生も参加しての賑やかな会となった。懇親会終了後、喉の時差ぼけを解消した方がいたと聞く。

3日目の発表終了後、18時からオールド チェンマイカルチャー センターでバンケットが盛大に行われた。民族音楽や古典舞踊を、気を許すとほとんどおあ向けで寝そべる状態になるタイ式三角枕に身を預けて堪能した。「地球の歩き方」によればこの料理は辛くないとのことであったが、十分タイの味「辛さ」を教えてくれた。多くの観客



写真3

が参加してのタイ舞踏は、なぜか盆踊りを彷彿させた。バンケットのあとに立ち寄ったナイトバザールでは、売り子たちのエネルギーや多くの外国人観光客が闊歩し、さまざまな言語が聞こえてくるのが印象的であった。

4日目の午後から本会議主催のエクスカーションがあった。The Queen Sirikit Gardenで参加者全員の写真を撮った(写真3)。エレファントキャンプで象の大量の排泄物を目にしたとき、その処理法が気になった。尿はキャンプ内の小河川に直接排出されており流下に伴う自然浄化法であった。これもフローインジェクション法の一部か？糞の処理については判らなかったが、日本の畜産農家でよく感じられる匂いは何故かほとんどなかった(写真4)。韓国料理と日本料理をミックスしてタイ風にアレンジした、鉄板焼と鍋料理を一つの鍋で味わう(食材は、肉、魚介類、野菜で肉以外は初めて目にするものばかり)夕食を野外でとった後、場所を替えてカラオケ大会が举行された(写真5)。詳細については、「ぶんせき」誌3月号を御覧いただきたい。

最終日は15時からのClosing Session終了後、16時15分発のバンコク行きに搭乗するため直ちにホテルを後にした。本会議の運営について、オーガナイザーの細かい配慮はもちろんであるが、学生スタッフ全員からも「本会議を成功させるんだ。」という意気込みが随所に感じられた。

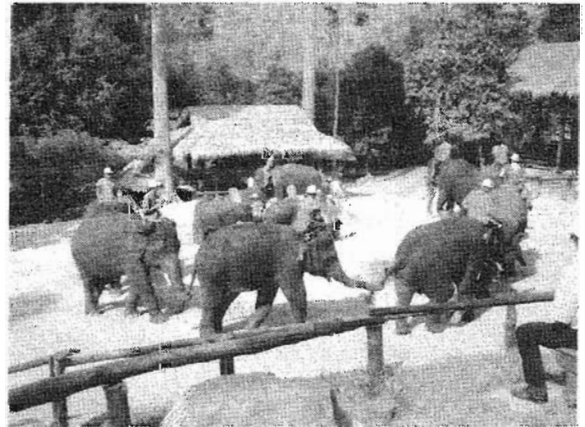


写真4



写真5

21日は、Orawan Chailapakul 先生 (Chulalongkorn 大学) と Duangjai Nacapricha 先生 (Mahidol 大学) と合流し、Chulalongkorn 大学を訪問した。大学の概要について説明、質疑応答ののち構内の主要施設を見学させていただいた。学生用化学実験室の器具類は少々年代を感じるものもあり懐かしさを覚えたが、設備面ではかなり充実しておりほとんどの基礎実験を行うことができると思われた。また、よく整理整頓され掃除も行き届いていた。

22日はいよいよ帰国である。閑空出発組は帰国便までの時間を利用して、水上マーケットなどを見学した(写真6)。帰国便の出発が数時間遅れるパプニングがあったものの、ほぼ定刻どおり到着し無事帰国した。

最後に、本会を企画運営した Dr. Kate Drudpan ならびに彼の研究室の学生、Dr. Orawan Chailapakul, Dr. Duangjai Nacapricha に感謝いたします。また、お世話をして頂いた諸先生方、ツアーコンダクターのように活躍された受田先生 (高知大学)、板橋先生 (群馬大学)、手嶋先生 (愛知工

大)、樋口氏 (エフ・アイ・エー機器株式会社) にお礼を申し上げます。来年度の本会議は、ベネズエラのメリダで開催することが決定しており、オーガナイザーである J. L. Burguera 先生 (Los Andes 大学) の力強くて甘い甘い参加の呼びかけを心にとめ脱稿とします。



写真6